

学生大使 実施報告書

氏名：菅原 昂大

学部・学科（コース）・学年：地域教育文化学部・文化創生コース・2年

派遣先大学：ガジャマダ大学

派遣期間：8月29日～9月13日

1 日本語教室での活動内容

山大生1人が教室に来てくれたガジャマダ大生1人～4人に対して授業を行う形だった。人によって日本語のレベル、英語のレベルが違うため、そのレベルがなるべく同じぐらいになるようにグループングしてそれぞれ授業を行った。

私は主にホワイトボードとPCを利用して授業を行った。ひらがなを学びたい人であればひらがな表、カタカナを学びたい人であればカタカナ表、漢字を学びたい人であれば、そのレベルにあった漢字をパソコンで表示した。そしてその書き方や、その表に書いてあるもの（例えば「き」であればキリンの絵が描いてあったり、「せ」であれば蟬の絵が描いてあったりする）を話題に会話を広げていった。ホワイトボードにはひらがな、カタカナ、漢字の書き順を実際を書いて示した。

また、ひらがなやカタカナの書き方というよりは、実践的な会話を学びたいという人には、英語と日本語を対で示し日本語の意味を英語で解説した。文法が日本語と英語では全く違うため、特に日本語の補語や付属語の解説に苦労した。しかし、こちらがたない英語であっても、伝える意思を見せるとガジャマダ大生は理解しようと努めてくれるうえ、ガジャマダ大生の理解力がとても高いため、コミュニケーションが非常に困難なことはなかった。

2 日本語教室以外での交流活動

日本語教室で仲良くなった人とともに昼食を取ったり、約束をして夕食に行ったりした。英語を話せる学生が多いため、基本のコミュニケーションは英語になるが、日常会話以上のレベルで日本語を話せる学生もいるため、コミュニケーションに困ることはなかった。休日はサポーターの方たちと相談して様々な場所に行った。ポロブドゥール遺跡や海、クラトン（王宮）など、日本とは違う街並み、遺跡の形、自然を感じながら過ごすことができた。

プランテーション体験ではさらにガジャマダ大のリアルな若者との交流が楽しめた。日本では考えられないほど広大な茶畑で、栽培の基礎から肥料や農薬の細かい部分まで、インドネシア語を英語に訳してもらった説明を聞きながら学んだ。また、移動のバスの中や宿ではカラオケをしたり、トランプをしたり、日本と同じ文化も感じつつ、そのやり方や、ルールの違いに戸惑ったりもした。環境的には厳しい部分も多かったが、人生で1度あるかないかの体験ができたと思う。

3 参加目標への達成度と努力した内容

今回の参加目標として日本や山形を客観的視点からとらえて考えて見るというものがあった。町や人を観察し、ガジャマダ大生に日本の印象や好きなこと、好きなモノ、疑問に思うことなどを日

【学生大使 実施報告書】

本語の授業の時に積極的に聞くようにした。そこで得た日本の印象は、国や興味の対象として日本があるわけではなく、生活に溶け込んだ一部として日本が存在していることだ。以前の私のイメージは、アニメや食など何らかの日本にかかわるものに関心が強いから、外国の人は日本語を学ぼうと思い、日本に興味があるのだと思っていた。しかし、そうではなかった。彼らが育つ段階で、多くの日本のアニメや特撮ものがインドネシアでも放送されており、日本風の食べ物や、看板、お菓子は街でたくさん見つけることができた。ガジャマダ大生になぜ日本語教室に来たのか、と問うと、はっきりと日本語を学ぶということを活かして何かしたいわけではなく、生活の中で断片的に知っている日本語への理解をさらに深めたいといった理由であったり高校で習った日本語をさらに生の日本人ら学びたいといった理由であったりした。また、街を走る車はほとんどが日本製であり、日本の飲食チェーン店も見られた。日本が外国として存在しているというよりかは、日本が溶け込んでいるなという印象が強かった。こうして、インドネシアから見た、日本はとらえることができた。しかし、初の海外、インドネシアに行き、そこからの日本を感じ考えることはできたが、その客観的視点だけでは日本を俯瞰するには足りず、もっと様々な国に行ってそこからの日本を見てみる必要があるなと感じた。

また、目標の一つとして、新たな価値観を吸収してくるというものもあった。インドネシアの人々と交流するうえで、日本人とインドネシア人の中には似ている部分が多くあることに気が付いた。もちろん人や性格によって違う部分はあれど、気の使い方や、遠慮の仕方、“空気を読む”という感覚は非常に似ているように感じた。土地、言葉を隔てても似ているものがあるのだなとうれしくなった。今までの自分と似た部分を感じた一方で、新たな風も感じた。働き方や将来のとらえ方が非常に自由なように感じた。例えば、日本ではホテルのフロントの人が Netflix を見だしたら上司にとてつもなく怒られるに違いないが、インドネシアではそうではなかった。そして、私はそれでもいいのではないかと思った。もちろん、日本のおもてなしの精神や真面目さを前面に出すことはホスピタリティの向上につながるかもしれないが、仕事がないときは休んだっていいし、客側が声をかけてきて、それに真摯に対応すれば、別にそれ以外は堅苦しくしている必要はないのではないかと思った。私は、現在日本では、人々が給料以上の仕事をすることで社会が回っており、疲労感ある空気がただよっているように感じるのだが、インドネシアでは与えられた仕事は真摯にこなすが、それ以外は自由、ゆえに町や店の空気が明るいように感じられた。新鮮だった。

4 プログラムに参加した感想

一言でいうと「最高」だった。自分だけではできない経験をこのプログラムを通してやらせてもらった。初の海外がジョグジャカルタでよかったなとも思った。インターネットでどこの映像でも見ることができる時代だが、現地の空気に触れて感じないとわからないことがたくさんあると改めて思い知った。例えば、インドネシア（ジョグジャカルタ）に若者の人口が多いからかもしれないが、街に活気にあふれているように感じた。町の前進を感じられる不思議な感覚だったが、面白かった。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

3でも示したように、日本をさらに客観的にとらえた知るためにはまだまだ視点が足りないよう

【学生大使 実施報告書】

に感じた。もっと様々な国と地域に行って色々なものを見てみたい。また、インドネシアの人が来日した際は積極的にアプローチしたい。

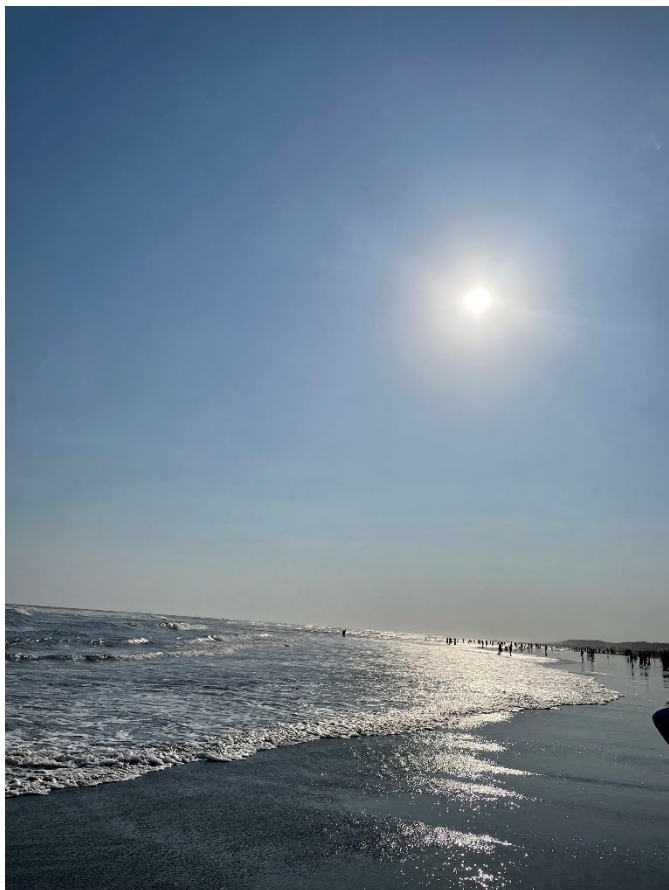


UMG メインホール前



カカオプランテーション

【学生大使 実施報告書】



ジャワ島の海（南側）



ボロブドゥール遺跡